

和刻本『福恵全書』の漢字にみる通用と誤刻

荒尾 禎 秀

要旨 和刻本『福恵全書』は一見してもなくなった中国版本を相当に忠実に翻刻しているものと推測される。ところが、漢字語と付された訳解との関係を丁寧に見ていくと、同一の語と思われるのに用いている漢字が、異体字ではない別字である例が、多くはないが見出せる。例えば「紀綱・紀綱」、「轡楨・轡楨」のような類である。本稿はこれらについて同一語なのかどうかの検討を行った結果の報告である。

同一語であるかどうかは問題の漢字の遣われ方が「通用」なのか、それとも誤刻によるものなのかを検討して判断した。本稿でいう「通用」とは漢字について本来字形や意味が異なる別字でありながら漢字音が同一ないし近似しているために互換して用いられる現象を言う。問題例として取り上げた漢字の組は、「藉・籍」「折・折」「簽・僉」「綱・網」「楨・楨」「候・侯」「狼・狼」「裁・裁」の八組である。

検討の方法は、問題の漢字について別字であるかどうか、辞書類に「適用」の記述があるかどうか、『福恵全書』の複数の中国版本を用いてそれらではどの漢字が使われているかなどにより、総合的に判断した。

その結果、以下のことが明らかにになった。(1) 和刻本での問題例は、多くはもとになった中国版本の漢字をそのままに翻刻したもので、独断で改変した可能性はほとんどないこと。(2) 和刻本が依った中国版本の特定は未だできていないが、版種について一定の見当がついたこと。また、この調査が依拠した中国版本の版種の特定に役立つこと。(3) 問題例が通用によるか誤刻であるかの判断は容易ではないが、一応の可能性を示せた。

一 はじめに

十七世紀末に中国で出版された『福惠全書』は地方首長が体験した、着任から離任までの様々な出来事の記録であり、役人官吏のための政治指南書でもある。この書は江戸中期以降に数度にわたり舶来し然るべき人に読まれた。これを儒者で医者の小畑行簡が幕末嘉永年間に訓点と大量な訳解を付して全巻を刊行した。和刻本により『福惠全書』は広く読者を得ることになる。

中国明清代の作物が日本に渡来し、日本語にも大きな影響を与えたが、そのことの研究資料は多く文学作品や語学資料である。『福惠全書』のような類は少ない。その点からも、和刻された「福惠全書」はどのような漢字語にどのような意味や語釈が付けられていて、近代日本語への影響はどうか、甚だ興味が持たれる。

しかしこの和刻本『福惠全書』を資料とした日本語学の研究は、基礎的な書誌研究も含めて、多くは未開拓である。

本稿は、和刻本『福惠全書』の多様な研究課題のうち、本文の漢字使用の適正さに関わる基本的なことについての調査報告である。

和刻本『福惠全書』（以下、「和刻本」と呼ぶ。）は、全三十二巻の仕立て方や本文はそのままに、一丁の行数や一行の文字数も、また書式例や細字の配りも、中国版本通りに忠実に翻刻している。その上で、訓点を施し、相当数の語句に訳解を付している。

したがって、「和刻本」は本文の翻刻にあたっては、その漢字においても中国版本をそのままに用いているもの

と推測する。そのような前提で和刻本の漢字と訳解の関係を整理していくと、異体字による違いは考慮してもなお、同じ語であると考えられるのに用いている漢字が違うという疑問例が見出せる。本稿では、訳解付きの漢字に限定して、そのような別字とされる漢字の通用に係る問題例を提示して調査と考察を行った。その結果、それらの例を現段階ではどのように考えるかを述べる。

なお本稿では漢字について「通用」を、本来字形や意味が異なる別字でありながら、音が同一乃至近似しているために互換して用いられる現象についていう。複合語の場合もこれに準ずる。また「字体」は社会的観念としての文字の骨組みをさし、「字形」はその個別的な表れとしての痕跡を言うものとする。

本文引用にあたっては、訳解は付されている漢字語の下にカッコ書きでそのまま書き示す。また常用漢字表にある漢字は通行の字体を用い、仮名の合字は仮名文字に直す。

二 『福恵全書』の中国版本と和刻本

和刻本『福恵全書』の概要は山根幸夫（1973）のほか荒尾禎秀（2020）に略述されているが、本稿に関わることを補っておく。

『福恵全書』の中国版本には十余の版種があると推測される^①。このうち日本の図書館には八種ほどがあり、そのうち二種類がインターネット上で全巻の画像が公開されている。宮内庁書陵部蔵の懷徳堂本、国立公文書館蔵（林家旧蔵昌平坂学問所蔵）の宝翰楼本である。本稿での中国版本の調査には、この二種と、中国刊行の周保明点校の活字本『福恵全書』を用いた。活字本は「前言」によれば底本は康熙三十八年濂溪書屋本を用い、光緒十九年京都沙土園書行文昌會館本を対校に用い、異同を注記する。以下、それぞれ懷徳堂本、宝翰楼本、活字本とよぶ。

和刻本は大別すると、同一板本であるが、通行本とその前段階の修訂本、更に明治期印本とがある。本稿で用い

るのは家蔵の通行本である。

そこで、次節では本文の漢字遣いを問題にするので、当該箇所²の漢字が通行本と印刷が最も早いと目される修訂本とで異同等がないかどうかを確認しておく必要がある。調査した結果、管見での修訂本二十余部においては、次節で取り上げる各項目での漢字、漢字語について異同はなく、修正も行われていない²。よって本稿が扱う箇所の漢字については通行本の文字遣いは当初のもの²とみなしてよい。

また、和刻本が中国版本のどれに基づいて作成されたかはわかっていない。ただし、次の点から懷徳堂本とは関係性が認められるが、宝翰楼本は和刻本とは関係しない。それは、和刻された修訂本のうちの早いもの、例えば三重県立図書館、龍谷大学、滋賀大学教育学部、国際基督教大学、大阪市立大学などの蔵本には、本文中に形式上不要な縦罫線が、第三冊目巻五1丁裏、第四冊目巻六7丁表、同巻六8丁裏の三箇所にある。この罫線は通行本では削除されている。懷徳堂本にはこの縦罫線はあるが宝翰楼本にはない。また巻二十八21丁、25丁の馬の図に付された書き込みの位置は和刻本と懷徳堂本は一致するが宝翰楼本とは異なる。さらに、和刻本も懷徳堂本も巻二十六の15丁目に「以上諸条」云々の4行があるが、宝翰楼本は欠落する。東北大学蔵（己B-5-1）の宝翰楼本も同様に欠落するので、これも理由に挙げられるかと考える。ただし、ここでの主張は中国版本のうち、和刻本が主に依拠したのは宝翰楼本ではないというまでで、複数の版を参看している可能性を否定するものではない。

三 具体例の検討

和刻本での訳解付きの漢字語で、双方同じ語であると考えられるのに、用いている漢字は別字である例や字体の似た漢字の誤刻かと思われる例がある。その数はさほど多くはない。

そのような漢字の遣い方が通用によるものなのか、誤字なのか、或いは別の事情があるのかにつき考察する。

検討と記述の方法はおおよそ次のようにする。

和刻本での問題となる漢字について、まず音や意味について、辞書類の記述をまとめて示し、中国漢字音が同一であるかをみる。『漢語大字典』をもとに、そこに記載の現代音（拼音による表示）、中古音（『広韻』はㄷ、『集韻』はㄹと略記。）と、『大漢和辞典』での日本漢字音としての字音の仮名表記（漢音・呉音）、意味とを合せて、「辞書類」として関係するところを中心に整理して記す。また問題の漢字について辞書類に通用に関する記述があればそれを記す。主として『漢語大字典』『漢語大詞典』『大漢和辞典』に依る。次に、問題とした和刻本の当該の漢字が、先に述べた中国版本ではどのような状況であるかを記述する。これらを総合して、どのようなことが考えられるかを述べる。

【ア】 藉・籍

問題例は「枕藉」「枕籍」である。「枕藉」は二箇所あり、「マクラカサネアヒ」（十三・七オ五）「カサナリ」（二十六・13ウ8）と訳解を付す。これに対して「枕籍」は一箇所で「ヒトガ、サナリシスル」（二十七・17オ2）とある。

訳解は近似していて、文脈の提示を略すが両者同一語とみる。漢字としては「藉」「籍」の対立である。問題となる漢字について辞書類は次のように記す。

〔藉〕（1）じやく ㄷ 慈夜切 去マ從 シヤ・ジャ しきもの・しく・かりる （2）じやく ㄷ 秦昔切 入昔從 セキ・ジャク みだれる・ふむ

〔籍〕（1）じやく ㄷ 泰昔切 入昔從 セキ・ジャク かきつけ・かりる・しく （2）じやく 『洪武正韻』詞夜切 去マ シヤ ゆるす・かりる

「藉」(2)と「籍」(1)は同音である。「藉」(1)と「籍」(2)も中古音は近似し現代音は同一である。『漢語大字典』の「藉」^[2]の⑥に「通『籍』。登記。」とあり、「^[2]」の⑫に「通『藉』。」とある。『漢語大字典』も同様であるが「籍」^[2]にも「通『藉』。」とある。また『大漢和辞典』では「藉」「籍」の双方に「別字」とあるが、「籍」(1)の⑧かきりる。かす。又、しく。」には「藉」に通ず。」「同じく「籍」(2)の①「ゆるす。」に「藉」に通ず。」とある。これらから、「藉」「籍」は同音で通用する場合があるといえる。

『漢語大辞典』は「枕藉」「枕籍」を共に見出しとしていて、前者には「亦作『枕藉』」、後者は空見出しで「見『枕藉』。」とある。問題とした例は通用しているとみてよい。

なお、日本でも中国でも、草冠は竹冠と異体字関係になることが多いとされる⁽³⁾。『干禄字書』では「藉・籍」を「上藉草 下簿籍」とする。その前書きにいう「相乱」の例である。按ずるに、これは「藉」「籍」は異体字ではなく別字であるが、混用しやすい、あるいは通用する事実があったことの傍証となろう。

問題とした3例が中国版本ではどうなっているかを見ると、懷徳堂本、宝翰楼本、活字本は3例ともいずれも和刻本と同一である。従って和刻本は中国版本に従っているといえる。

以上をまとめれば近世中国に於いては「枕藉」「枕籍」が通用していた可能性があり、その中国版本の揺れが和刻本にもそのまま引き継がれたとみる。

もう1例、「藉」「籍」に関わる問題語に「狼藉」がある。

「狼藉」は2例(七20ウ4・十七6ウ6)あるが、誤解付きの「狼藉」は例がない。「狼藉」が複数例有ることに注目したい。

「狼藉」が一般であるが、『漢語大辞典』には「狼藉」と併用する記述があるので、通用するとみられる。

この「狼藉」の二箇所は中国版本でも懷徳堂本、宝翰楼本、活字本とも「狼藉」である。

したがってこの例についても、和刻本のそれは中国版本に倣っていると考えられる。また、近世中国で「狼籍」は「狼藉」と通用していると考ええる。

「藉」「籍」の使用例は多いが、ここで扱ったもの以外には問題はない。

【イ】 拆・折

問題例は「密拆」「密折」である。「密拆」(「ナイナイヒラケト」二十三4ウ4)に対して、近接した位置に同じ訳解で「密折」が「疎書(シユガキ^シ某^ノ郷^ノ保長某^ノ人密折(ナイ、ヒラケ)^{セヨト}」(二十三4ウ1。引用文中の傍線は本稿筆者による。以下同じ。)とある。「密拆」「密折」はこれしか例がない。「拆」「折」の対立であるが、この両語は同一とみる。

辞書類は次のようである。

【拆】(1) chāi ㊤恥格切 入陌徹 タク・チャク 裂く (2) chā ㊤昌石切、入昔昌 セキ・シヤク うつ
【折】(1) zhé ㊤旨熱切 入薛章 セツ・セチ 断つ (2) shé ㊤常列切 入薛禪 セツ・ゼチ ちぎれる
(3) cā ㊤杜奚切 平齊定 テイ・ダイ 安らか

「拆」「折」は音が異なり、辞書類での通用に関する記述もない。意味に似寄りはあるが、別字で通用しないと考える。

訳解に「ヒラク」とあるのは「拆」に相応するので「密拆」がよい。『漢語大詞典』『大漢和辞典』とも「密拆」を見出しにする。その挙例は両辞書とも1例で『福惠全書』の右の「密折」に相当する箇所である。

問題箇所が中国版本ではどうなっているかを見ると、懷徳堂本はこの2例は共に「拆」、宝翰楼本は和刻本同様「拆」、「折」である。活字本は共に「拆」である。

これから次のことが言える。

和刻本の「密折」の用字は懷徳堂本とは違う。このことは和刻本が依った中国版本がここで扱った諸版とは別な版種であり、それには誤刻か欠刻があり「折」であつたということか、或いは中国版本と関係なく和刻本が字体の似寄りで誤写誤刻したためかである。和刻本ではこの付近の「折」字は最終画の点が縦線と交差するのが一般であるから欠刻の可能性は低いとみる。和刻本には「密折」が1例しかないので判断しがたいが、「折」「折」が通用しないとすれば、この漢字「折」は「折」を正しいとすれば誤りである。なお、宝翰樓本のように中国版本でも近い位置で両字が混用する版種がある、ということについてはそれがなぜなのか考えがまとまらない。

問題例と近い位置にある「拆開」(「ヒラキテ」二十三4ウ2)は和刻本、中国版本とも諸本「拆」で正しい。また、訳解付きで「拆」ないし「折」を含む他の語例で問題となる箇所は「密折」以外はない。

一方、巻七「錢穀部」の12丁からの「拆^レ貯(カネヒツノフタ)^ヲ」の節の「拆^レ封^ヲ」の項には訳解が付いていない「拆」字が12例集中して表れる。このうちの「帰(クミイル、)^ニ本日(ソノヒ)所^レ折^ク数内(タカノウチ)^ニ」の部分の「折」字は文脈や訳解から「拆」がよい。中国版本を見るに、懷徳堂本は和刻本同様だが、宝翰樓本は「拆」、活字本も「拆」で校異の注記はない。したがって、この箇所は懷徳堂本と和刻本とが誤っていると言える。逆に、この項の末尾細字部分に「所^レ拆^ク」(七13ウ9)とあるところは、底本、懷徳堂本、活字本とも「拆」で問題なしと考えるが、宝翰樓本は「折」である。他は問題ない。

単字用法の「拆」「折」は字形が似るにしても別字であるのにやや混用が目立つ。通用の可能性も考えるべきか。字形の近さゆえの誤字誤刻があるのかもしれないが、中国版本でも「拆」字は最終画の点の位置は二様あるので欠刻にもなりうる。或いはそういうこともあるのかもしれない。誤刻、ないし欠刻とみておく。

【ウ】 簽・僉

問題の語は「浮簽」「浮僉」である。「浮簽」は4例(二22才8・四18ウ4・七7才7・七8ウ9)あるが、他に「浮僉」(七5ウ5)がある。いずれも訳解は「ツケガミ」である。

「簽」「僉」について、辞書類は次のように記す。

〔簽〕 qian1 ⑧千廉切 平塩清 セン 名を記す

〔僉〕 qian1 ⑦七廉切 平塩清 セン みな

『漢語大字典』は「僉」の⑥に「用同^レ簽^ノ」1簽署。2簽発。」とし元以降の用例を示す。同様に『漢語大詞典』も「僉」の項目で「后多作^レ簽^ノ」とし、挙げるのは宋以降の例である。また『中日大辞典』は「僉」と「簽」は「記名する」の意味において同義とする。このように、「簽」「僉」は声符が等しく同音であり通用する。これらから『福恵全書』でも「浮僉」は「浮簽」と通用していたことを反映したものと言えよう。

『漢語大詞典』『大漢和辞典』とも「浮簽」を見出しとし、その挙例は『福恵全書』の右の巻四のそれである。

中国版本での状況は懷徳堂本、宝翰楼本とも和刻本と同じである。活字本もまた同じであり校異の注記はない。従って、「浮僉」は中国版本がそうなっていて、和刻本はそれに従ったことになる。

和刻本での訳解が付された「簽」「僉」を構成要素にする漢字語は右の他39例あるが、そのいずれもが懷徳堂本、宝翰楼本共に異同はない。このうち当時「簽」「僉」通用である漢字語を推測するてだてを持たないが、これらの語を『漢語大詞典』でみると、両字が交代する見出し語には「僉(簽)解」「僉(簽)票」「僉(簽)押」「僉(簽)名」がある。これらも語釈から見て通用例とみたい。『福恵全書』に表れた訳解付きの「浮僉」は1例しかないがこの様な状況下での「浮簽」との通用の表れと考える。これがそのまま和刻本に受け継がれたとみる。

【工】 綱・網

「綱」「網」については、まず「紀綱」「紀網」が問題である。「紀綱」(二14ウ5・十一18オ7)には2例とも「バントウ」と訳解がある。これに漢字を宛てれば「番頭」である。一方、用字の違う「紀網」(三8ウ2)には「カラウ」と訳解が付されているがこれは「家老」であろう。この両者は文脈や訳解から同一語であると考ええる。

「綱」「網」について辞書類は次のようにある。

〔綱〕 gang1 ㊦ 古郎切 平唐見 カウ つな・大綱・おきて・あみ

〔網〕 wang3 ㊦ 文両切 上養微 バウ・マウ あみ・おきて

両字は意味に関連するところはあるが音は不同であり通用しないと考えられる。そうであれば「紀綱」は誤っているということになる。

しかし『大漢和辞典』の「綱」の項目には「⑦あみ。網に通ず。」とある。『漢語大字典』には通用に関する記述はないが、「綱」の項目に『大漢和辞典』と同じ用例などを引き「大綱」と語釈する。或いは字体の近似や意味の関連性から通用することもあると見るべきか。

『漢語大辞典』『大漢和辞典』は「紀綱」の方を見出しにする。後者の語釈の③「番頭」には『福恵全書』巻一の先述の例を用いている。

中国版本では、問題のある「紀綱」の箇所は懷徳堂本も宝翰楼本も和刻本同様「綱」である。活字本は「綱」だが校異注記に「綱、康熙本、光緒本作「網」、拠文義改。」とあるので中国版本は皆誤っている可能性がある。

「紀綱」はこの他に1例(「シマリスル」二十五25オ8)あり、また「紀綱法度」(「オキテ」十一27オ7)もある。文字が転倒の「綱紀」(三十三3オ8)も含めて問題例以外は、これらみな正しく「紀綱」ないし「綱紀」とする。よってこの問題箇所は、中国版本では多く「紀綱」のなか、「紀綱」も併用されているということになる。「綱」

「網」別字であり孤例なので通用とはしがたい。さりとて「綱」を「網」に誤るとも思えない。いずれにせよ和刻本はその中国版本での漢字遣いをそのままに受け継いだものであると言える。

これとは別に、「アハレミ」と訳解する「泣車湯綱」（三十三5ウ9）の「湯綱」（4）は、湯王の故事による語なので和刻本の「綱」は誤りである。中国版本は懷徳堂本は和刻本と同じで誤り。宝翰楼本、活字本の「綱」が正しい。

この2例から、「綱」「網」は音が不同であり通用しないと考えるが、誤刻ともいえず、判然としない。いずれにしても和刻本は中国版本に従っているとみる。

これらに加えて次のような例がある。

「憲綱」と「憲綱」である。「憲綱」は2例あって、「オキテ」（十三10ウ5）、「カミノオキテ」（二十五ウ4）と訳解する。一方、「ヒトムラノコラズノカキツケ」と訳解する「憲綱冊」（四20ウ6）がある。後者は「カキツケ」に相当する「冊」を除くことができるであろうから、「憲綱」「憲綱」の対立がみられることになる。また、「憲綱冊」の訳解では、何についての「カキツケ」なのかは明示されていない。この限りでは「憲綱」「憲綱」が別語なのかどうかはわからない。

中国版本での「憲綱」「憲綱」の箇所は、諸本和刻本と同じである。

既に述べたように「綱」「網」は別字であるが誤る可能性がある。そこでまず『漢語大詞典』を見ると両者とも見出し化されていて、「憲綱」は「法綱」、「憲綱」は「法紀、法度。」とある。『大漢和辞典』でも両者を見出しにし、「憲綱」は「おきて。のり。刑綱。法綱。」、「憲綱」は「大きなのり。おきて。法律の綱領。法則。又、官職の秩序をいふ。」とある。用例からみるといずれも古漢語のようであるが「憲綱」は近代中国語としても用いられている。これらの辞書からは「憲綱」と「憲綱」は別語の可能性がある一方、「綱」「網」が誤ることがあり、場合に

よって通することもある漢字なら両者は同一語である可能性もある。

ところで「憲綱冊」とはなにか。巻四に「憲綱冊式」という標題でその内容が記されている。首長が赴任した際のあれこれを記した「蒞任部」のうち、上級の役所との文書のやり取り取りを示した「文移諸式」のうちの一つの文書の型式である。その題目に用いられているのが当該例である。またその書式例の頭に訳解はないが「憲綱」がみられる。即ち「某_ノ省某_ノ府某_ノ州_ノ 為_{下ニ}申_{スル}文冊_ヲ事_{今ヲ}本州_{所ノ}属_{スル}憲綱_ノ事理_ヲ依_{レテ}例_ニ繕造_ス理_{（トリハカラヒ）}合_シ申_{送ス}須_{レシ}至_ル冊者_ニ」の部分にも用いられている。本稿の筆者に知識がなくわからないが、書式例の内容からみると、「憲綱冊」は当該役人が管理監督する下級官吏の人員内訳一覧である。とすれば「オキテ」と訳解する「憲綱」とは意味が同じではないようである。そこで注意されるのは「憲」の意味で、『中日大辞典』では「文語」として「上役。上官。」とある。『漢語大詞典』の「綱」に「⑦指州郡主簿。」とあることも考えあわせれば「上級官職の（人員に関する）統括記録」のような意味かと推測される。『大漢和辞典』に「又、官職の秩序をいふ。」とあるはこの類に符合するかと考えられる。「憲綱」と「憲綱」は少なくとも『福恵全書』の例に関しては音も意味も違うから別語というべきであろう。さらに言えば、この例を参考にすれば「綱」「綱」が通じるということとは一般にはないことになる。

なお、右で問題にした例を含め、和刻本での「綱」の使用例19、「綱」の使用例13を調べると、字形が崩れていて判断しにくいものはあるが、右以外に明瞭に用字用語に問題のある例はない。

【オ】 楨・楨

「楨」「楨」を用いた語例は次の4例である。いずれも近似した位置にある。まず、次が同じ語とみられる例である。

「轎槓」(「カゴカツパカゴ」二3ウ1)。「轎槓」(「カゴカツパカゴ」二13ウ6)。

訳解語や文脈から見て同一と考えるが「槓」と「擯」の違いがある。

『漢語大字典』では「槓」は「杠」と、「擯」は「扛」と同じとするのみで、全てを「杠」「扛」の項目で記述する。

『大漢和辞典』は「槓」は「杠」の俗字とし『中華大字典』を挙げて「読如杠」とし、「てこ、小橋」と字解し熟語も挙げる。「擯」は見出しになっていない。

『福恵全書』に於ける「槓」「擯」を「杠」「扛」に置き換えて全く差支えないものかどうか不安があるが、いまとりあえず、右にしたがい「杠」「扛」についての辞書類の記述を示す。

「杠」(1) gang1 ⑤古双切 平江見 カウ 横木・旗竿・小橋 (2) gang1 ⑧沾紅切 平東見 コウ・ク地名 (3) gang4 太い棒

「扛」(1) gang1 ⑤古双切 平江見 カウ 挙げる・かつぐ (2) kang3 ⑧虎項切 上講曉 カウ 担う

「杠」の(3)は現代中国語の主たる用法のようである。「槓」「擯」にせよ「杠」「扛」にせよ、通用に関しての記述は見当たらないが、音は同一また近似しているところがある。意味的にも名詞的か動詞的かの違いはあるが関連性はある。両字は通用する可能性がある。ところで『漢語大詞典』の「扛」には『漢語大字典』に記載のない「gang4」が挙げられていて「同〳槓。参見〳擡扛。」とあり、「擡扛」が「擡槓」と共に「争う」といった意味を同じくして見出しになっている。これはこの漢字語の場合は通用するということなのか。また『大漢和辞典』は「轎槓」と「轎杠」を共に見出しとしている。前者は「かこ。かつぱかこ。」と語釈し、その用例はここで取り上げた二3ウ1の「轎槓」である。後者は「轎の腕木。」とする。「槓・擯・杠・扛」の関係性が本稿の筆者には理解しがたい。この時代の文献用例と現代の辞書での記述との間で問題がありそうでもある。

和刻本での用い方を見ると、「轎槓」は「照_二依_一(トホリ)_シ後開(シモニカキダス)ノ夫馬轎槓(カゴカツパカゴ)ノ

名数」、「轆損」は「有無欠額（キメダカヨリフソクアルナシ）轆損（カゴカツパカゴ）青白夫（アヲシロキカンバンキタルモノ）若干名」という文脈で使用されている。これと辞書記述をあわせみると両例とも名詞用法の「損」がよい。ちなみに「合羽籠」は『日本国語大辞典』第二版に登録されている。

ところが和刻本「轆損」の箇所は懷徳堂本、宝翰楼本、活字本いずれもが「轆損」である。一方、和刻本の「損」の箇所も懷徳堂本、宝翰楼本、活字本とも「轆損」である。つまり、中国版本はこの二箇所とも「損」を用いる。

この他に次の2例も問題である。

「榎架」（「カツパカゴ」二3ウ4）、そして「損箱」（「カツパカゴタンス」二14ウ9）。

この具体的文脈は、「榎架（カツパカゴ）幾副（ソロヘ）」、「椅（コシカケ）卓（シヨク）鋪陳（シキモノオキツケ）執事（カ、リ）損箱（カツパカゴタンス）等、件」といずれも名詞「合羽籠」で「榎」がよいと思われる。然るにこの2例もまた中国版本の諸本は活字本を含めて「損」を用いている。つまり、懷徳堂本、宝翰楼本、活字本で見ると限り中国版本は名詞「合羽籠」に動詞系の「損」を用いているということになる。

見る範囲では「榎」「損」混用は和刻本だけであるが、これ等から考えられることは次のような可能性であろう。

第一に、ここで取り上げていない中国版本の中に和刻本と同じ「轆損」「榎架」の用字の版種がある場合で、それが和刻本の依拠した中国版であるため和刻本も同じになっている、という可能性である。この場合、その中国版本はなぜ「榎」「損」を混用しているのかという疑問が残る。「榎」「損」は通用していた、という可能性がある。手偏と木偏の交替している異体字の例も指摘されることも考え合わせるべきか。

第二に考えられるのは、和刻本の「轆損」「榎架」の箇所が未見の他の中国版本を含めていずれも「損」であった場合で、そうであるなら、和刻本は中国版本の当該箇所をそのままには継承しなかったということになる。それ

は和刻本での誤刻と言つてよいが、この場合も両字の部首が異体字関係を為すという状況下での結果である可能性までも否定はできない。

「積」「擯」の対立がどういう事情なのかは、和刻本の依つた中国版本が特定された後に改めて考えてみたい。

【力】 候・侯

「候」「侯」について、「聴候」「聴侯」がある。和刻本に「聴候」は二例（二9オ6、二十20オ3）あり、「聴侯」は一例「門子（ソバットメ）一名在^テ堂簷（ノキ）右側^ニ站立（タツテ）^シ聴侯（マチヨリ）^{シテ}執^ル籤^ヲ」（二10オ1）にある。この「聴侯」は、誤解と文脈からみて「聴候」の誤りと考える。

辞書類には「候」「侯」両字について次のようにある。

〔候〕 hou4 ㊦ 胡遘切 去候匣 コウ・ゴ うかがう・待つ

〔侯〕 hou2 ㊦ 戸鉤切 平侯匣 コウ・ゴ まと・きみ・諸侯

両字は同音ではないが近似する。通用については、『漢語大字典』の「候」に「通^ク候^フ。迎。」とある。これは「候」の語釈に「古時迎送賓客的官」とあるのに相当するのであろうから、近世近代中国でも通用が言えるのかはわからないが、過去にそういうことはあったのであろう。『大漢和辞典』は「候」には『説文通訓定声』の「候、段借為候」を引いて「うかがう。候に通ず。」とするが、「候」には「侯は別字。」とも記す。別字ながら一部通用するところがあったと考える。『漢語大詞典』『大漢和辞典』は「聴候」を見出しとし、宋以降の用例を挙げる。後者の引用例の一つは右に示した正用の卷二の例である。

中国版本をみると懷徳堂本は和刻本同様「聴候」とするが、宝翰樓本は「聴候」、活字本も「聴候」で注記はない。これらから、問題例は懷徳堂本に類した系統の中国版本を引き継いだとみる。また中国版本でも版種の違いで「候」

「候」が揺れるのは、通用によるものかもしれない。

一方、前例とは逆に「候」とあるのは「侯」の誤りかと考えられる次の例がある。

侯氏と張氏の土地争いについての記述の発端部分で、「張成祖所_レ買_フ地四十二畝（セ）_レ條_テ候」（コウ、ジトナリ）
條_テ張（チャウ（ニ）ジトナリ）此_レ業（デンチウリカヒ）之_ヲ為_ル朝秦暮楚（アサユフカハル）者非_ニ一日_一矣」（十二25ウ4）とある。訳解からも「侯氏と成り」であり、この後の部分では何度も人名「侯」は出てくるので、「候條張」と紛らわしい所での音と字体の近似からくる誤りかと考えるが、通用している可能性は否定できない。

この例は懷徳堂本、宝翰樓本とも「候」に誤る。活字本は正しく「侯」で注記はない。和刻本は中国版本に従っているとみる。

なお、和刻本で「侯」は右の例の他に「元侯」（ブギヤウ）など6例あるが、その文字遣いに問題はなく、中国版本二種でも同じである。また「候」は右の例の他71例を得るが、これには和刻本には問題がないが、宝翰樓本に問題例が一つある。和刻本「須_シ守候（マツ）半日_{ナル}」（二十一22ウ3）の「候」が明瞭な「侯」となっている。この箇所は懷徳堂本は「候」、活字本も「候」で注記はない。したがってここは宝翰樓本のみが違っていることになる。諸例あわせると字体の近似もあり、或いは誤りというより通用と言った方がいいのかもしれない。

【キ】狼・狼

単漢字の問題である。「太タ狼（ヒドキ）ナル者」（十七15ウ2）という例がある。この「狼」は「狼」が好ましい。

和刻本では訳解付きの「狼」「狼」の使用例が都合15ある。単字での使用は「狼」にはなく「狼」は5例ある。これを含めて使用例いずれも使い分けられているなかでこの1例のみが問題となる例である。

辞書類では次のようにある。

〔狼〕(1) lang² ④魯²当切 平唐来 ラウ おおかみ・すさむ

〔狼〕(1) yan² ④五閑切、平山疑 グワン 犬の争う声 (2) hen³ 『篇海類編』下懇切 コン 凶惡・甚だ

両字は音が不同で意味も違う別字であり、辞書類に通用の記述もない。文脈から判断しても「狼」は誤りと言つてよい。

しかしながら当該箇所は懷徳堂本、宝翰楼本とも「狼」である。活字本は「狼」とするが、注に「狼、康熙本、光緒本此処作「狼」、拠前文改。」とある。和刻本は中国版本に従っている。

中国版本が「狼」を「狼」に誤る事実はどう考えるか。孤例であることもあり、これはたまたま中国版本が字体の近似から諸本誤りを継承しそのまま和刻本にも引き継がれたものと考えておくが、【オ】の場合と同様の可能性がある。膨大な文字数の書籍には誤刻はあつて当然と言えるが、ここでは和刻本が中国版本を、いわば無批判に、そのままに翻刻したその忠実さを確認しておきたい。

なお、「狼」に関連する漢字に「很」がある。諸辞書に「狼」は「很」と通用するとある。和刻本には訳解付きの漢字語については「很」は使われていない。和刻本での「狼」の箇所は懷徳堂本、宝翰楼本ともに同じく「狼」である。

【ク】裁・裁

単漢字の問題である。「人丁^ハ則売^リ富^ヲ裁^ル」(タツ^ル貧^ヲ) (九5才1)の文中の「裁」は、意味からみて「裁」が適当と考えられる。

「裁」「裁」は辞書類では次のようにある。

〔裁〕 (1) *zai* ㊦ 昨代切 去代従 サイ・ザイ 長い板 (2) *zai* ㊦ 祖才切 平哈精 サイ 植える

〔裁〕 *cai* ㊦ 昨哉切 平哈従 又昨代切 サイ・ザイ 裁つ・へらす・さばく・衣服を作る

音は近さはあるが不同である。しかし通用に關しての記述はない。字体は似ているとはいえ、意味は違うので、義符が混じて通用するということはないように思う。両字は別字で通用しないとみる。

この箇所は懷德堂本では同様に「裁」とある。宝翰樓本はこの文字に部分的な欠刻があり判定しにくいだが、どちらかというと「裁」か。活字本も「裁」であるが校異の記述はない。和刻本の問題例は中国版本をそのまま翻字したものと考える。

「裁」が単字で使用されている訳解付きの例は他にない。「裁」のほうの単字の例は「キリ」「キメタ」「ツクル」(各、二十八・22オ7・三十五オ4・三十一・13オ5)の3例がある。いずれも問題はなく、中国版本も同様である。

和刻本の右の例以外の「裁」を含む語7例、「裁」を含む語21例を調べても問題例はない。またこれらの例を中国版本でみると字形は明瞭で問題もない⁽⁵⁾。

したがって、この問題例は中国版本を引き継いだものと見ておく。中国版本では「裁」とあるべきをなぜ「裁」にしているのかはわからない。ひとつの文献中の多数の文字の内に、たまに見られる誤刻と考えておく。

四 まとめ

取り上げた諸例に關してまとめ、問題点を述べると次のようになる。

和刻本は中国版本の懷德堂本に多く一致する。不一致のところもあることを考慮すれば、和刻本が依拠した版種は懷德堂本に近い系統のものと推定する。このことから和刻本の漢字の遣い方はまずは中国版本に従っており、独断で改変した可能性はほとんどないといってよい。また、本稿で扱った諸例のありようは、和刻本が依った版種の

解明に有力な情報を提供するであろう。

取りあげた例が通用によるものか誤刻などの「誤り」や欠刻による表れかは、総じて判断が難しい。一応の判断を字種で示せばとりあえず次のようになる。

通用と考えるものは「藉・籍」「簽・僉」で、「候・俟」もその可能性がある。誤刻や欠刻によると推定するものは「拆・折」「狼・狠」「裁・裁」で、「綱・網」もそうであるかもしれない。「楨・楨」は判断が難しい。

今後の議論のために模式化して示すと次のようになる。

- (Ⅰ) 和刻本が懷徳堂本と一致し、中国語として通用しているとみるもの。
- (Ⅱ) 和刻本が懷徳堂本と一致し、中国語として通用してはいないとみるもの。
- (Ⅲ) 和刻本が懷徳堂本と不一致で、中国語として通用しているとみるもの。
- (Ⅳ) 和刻本が懷徳堂本と不一致で、中国語として通用してはいないとみるもの。
- (Ⅰ) (Ⅱ) がほとんどである。(Ⅱ) は中国版本において「誤り」があったとみる。(Ⅲ) (Ⅳ) は和刻本が依拠した懷徳堂本系の版種が判明すれば(Ⅰ)や(Ⅱ)と同じになる。そうでない場合は(Ⅲ)については和刻する際に「誤り」があったとみる。また(Ⅳ)は和刻の際の「誤り」の可能性に加えて、中国版本に「誤り」があったと考える。

ここで「誤り」としたのは、誤刻の場合もあれば臨時的ないわば通用ともいべき場合もあることの可能性を認めてのものである。通用でないものの存在をどうかんがえたらよいかは今後の課題とする。

ところで、和刻本を作成する過程において、中には疑義を抱く文字遣いも当然あったと思われる。その場合はどう処理したか。それは原文には手を加えずに、例えば眉批によって提示したにとどまると考える。和刻本では存疑のある漢字について、その所在する行の匡郭上部に「A作当B」「A当刪去」などのように記している。この眉批

がいつどのような経緯で加えられたか不明であるが、通行本に先立つ修訂本のいずれにも既にそれはあるので、草稿段階から用意されていたものと推測する。ただし、本稿で述べた類の漢字は、みるところ扱っていない。和刻本の眉批については今は紙幅もないので別に述べたい。

本稿は筆者にとって門外漢のところが多く、誤りがあることを懼れる。

注

(1) 周保明『福惠全書』『前言』に記載の版と、日本国内の大学図書館及び公立図書館の蔵書検索等による本稿筆者の調査とを合せると次のような諸版がある模様。Aは日本及び中国にあるもの。Bは日本にあつて中国にはないもの。Cは日本にはないもの。詳細な書誌の調査報告があるかどうかは不明。また本稿筆者の実見したものは未だ若干にとどまる。

A Ⅱ 種書堂本・懷德堂本・濂溪書屋本・桃源書屋本・康熙間刻本・京都沙土園書行文昌會館本。

B Ⅱ 宝翰楼本・同文堂本。

C Ⅱ 敬書堂本・文瑞楼本・大文堂本・三多齋本。

(2) 通行本とその前段階の修訂本とを比べると、約45字が手直しされている。例えば「兕食」(「ワルヨクバリ」十二19オ8)の「貪」字の「今」部分が初めは「合」に誤っていたのが、あるいはまた「内閣」(「ヘイノウチノヘヤ」二十二2オ2)の「閣」字の「合」部分が当初「台」に誤っていたのが、通行本では改められている。ほとんどは単純な誤刻の補正で、別漢字に直したという例はないと言つてよい。

(3) 例えば、太田品二郎「古文書のおみ方―異体字一隅―」(『郷土研究講座』第七卷 角川書店 1967年) 参照。

(4) 「泣車湯網」の「泣車」は「漢語大詞典」等にもなく容易にその典拠を得られないが、「湯網」に相当すると考えられる。東京学芸大学大学院修了生(蘇州大学日文学科卒業生)の張金榮氏の指摘に依れば「泣車」は「説苑」「君道」の「禹出見罪人、下車問而泣之」によるのかもしれない。この故事は「東京大学東洋文化研究所蔵漢籍全本全文影像資料庫」等の『群書治要』卷四十三の1丁裏に見える。

(5) ただし「自裁」(「シス」十六18ウ8) について懷德堂本は「裁」のように見えるが、当該漢字は墨で重ね書きされている

ようなので除外例とする。

参考文献

- 荒尾禎秀 (2020) 「和刻本における左振仮名の性格——『福恵全書』の助詞「へ」「に」からの考察——」『清泉女子大学人文科学研究
所紀要』第四十一号
- 酒井憲二 (1974) 「日本的漢字遣について——同然と同前をめぐって——」『語文』第三十九輯 日本大学国文学会
- 高橋久子 (1995) 「室町時代の文献に見られる漢字の通用現象に就いて 其二」『東京学芸大学紀要 第2部門人文科学』46
- 『漢語大詞典』(1986) 漢語大詞典編輯委員会 中国・上海辭書出版社發行所
- 『漢語大字典』(1986) 漢語大字典編輯委員會 中国・四川辭書出版社
- 『宋元以来俗字譜』(1968) 近世文学史研究の会 文化書房博文社
- 『大漢和辞典』縮写版第二刷 (1968) 諸橋轍次 大修館書店
- 『中日大辞典』第二版 (2010) 愛知大学中日大辞典編纂所 大修館書店
- 『福恵全書』(2018) 周保明 中国・広陵書社
- 『福恵全書 附索引』(1973) 山根幸夫 汲古書院
- 『福恵全書』懷德堂本 宮内庁書陵部蔵 函架番号 205——28 (最終閲覧 2021年2月27日)
<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000055780000>
- 『福恵全書』宝翰楼本 国立公文書館蔵 請求記号 297——0039 (最終閲覧 2021年2月27日)
<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F1000000000000097954&ID=M2014070820313966458&IYPE=&NO=>

Study on Kanji usage and misuse in *Fukukei-zensho* (福恵全書)

ARAO yoshihide

Abstract *Fukukei-zensho* (福恵全書), published in Japan in the late Edo period, is a fairly faithful reproduction of the Chinese original. However, the text printed in Japan includes examples of the same word written in different *Kanji* (漢字). For example, “紀綱/紀綱”, and “轎槓/轎槓”. In this paper, examples of *Kanji* were examined whether they originated from the same word.

As for the method of research, dictionaries were used to examine whether the words came from a different *Kanji* or of the same origin. In addition, several Chinese editions were used to find out which *Kanji* were used in the areas being investigated. Judgment was made comprehensively based on these criteria.

Observations suggest that: (1) *Kanji* investigated are reprinted from the original *Kanji* of the Chinese version. (2) In this study, it was possible to estimate which Chinese version of the book was based on the Japanese book. (3) Although it is not easy to judge whether the *Kanji* example comes from the same origin or not, the Study showed the possibility.

Key words: Publication in Japan, Same word, commonality